

結論から言うと今回の研修は、私が思っていた以上に充実したものであり、文面で表してもその充実さは伝わらないかもしれない。しかし、この報告で少しでも研修の素晴らしさが伝われば幸いであり、興味を持った方は、ぜひ次回研修に参加していただければと思う。

今回、臨床および研究に対する考え方や取り組み方についてアメリカの現状を学ぶこと、および最先端の研究である分子イメージングの研究内容や今後の展望について学ぶことを目的に本研修に参加した。達成度は満足できるものであったが、それら以外にも多くの収穫があり、実りのある研修であった。

アメリカでは、CT、MRI、RI 等の各モダリティに従事する場合、専門性を高めるためにそれぞれライセンスの取得が必須である。日本においても、専門性を重要視する考えが普及しつつあり、ライセンス取得や免許更新制度が導入される日は近いであろうと思われる。病院見学では、CT や MRI の時間枠が 1 検査あたり 1～1.5 時間であり、ゆっくりとした業務体制に驚いた。病院の収益を最優先する日本では、このような業務体制は考えられず、医療制度や文化の違いが大きく関与していると感じた。また、3D を構築するための独立した部署 (3D ラボ) があり、構築の際は技術者による差がでないよう教育およびマニュアル化がなされていた。

スタンフォード大学は、世界でも屈指の研究機関であり、世界中から集まった優秀な研究者による医療研究が盛んに行われている。ここに集った研究者は、医療における“将来像”を見据えて研究に取り組み、多くの成果を上げている。発想 (アイデア) 力、実行力、人材および環境等全てにおいて最高水準であると感じた。今回は、最先端の研究である分子イメージングに触れることができた。分子プローブの開発、PET や MRI 等のマルチモダリティイメージングの有用性、新しいモダリティとしての Photoacoustic Imaging、動物実験施設の見学などが印象的であった。また、MR-Elastography、MR-HIFU、MR-PET、MR-Hyperpolarization や 7T-MRI 体験も印象に残った。

研修のもう一つの醍醐味である志高い研修生たちとのディスカッションは、今の自分を改めて見直す良い機会となり、物事に対する考え方や捉え方など今後の自分にとって有益なものとなった。今回、この研修生たちに出会えたことを嬉しく思うとともに、またいつかディスカッションできる日がくることを願っている。

今回の研修は、日本では経験できない貴重なものであった。今後は、本研修で得たことを糧に、常に志高く、そして広い視野を持って臨床や研究に取り組んでいきたい。

最後に、本研修の開催にあたりご尽力頂いたスタンフォード大学、日本放射線技術学会、GEHC-J の方々、ならびに引率して頂いた九州大学病院の西川氏、そして研修参加に快く承諾して頂いた本院諸兄に心よりお礼申し上げます。



Michael Moseley 先生とお決まりのポーズで！